

「ゾーニングの例示」に対する意見

発災場所	意見
一般住宅	<p>○風向きを考慮した場合であっても、パターン1と3では、一般公道もウォームゾーンとすべきと考える。進入統制ラインまではマスコミも含め一般市民が迷入する可能性があるため、市民の安全を確保すべきである。また、現実的には風向きが安定していない場合もあり、その可能性も考えて、あまり風向きに拘らなくても良いと考える。むしろ、急に風向きが変わっても慌てずに済む風向変化を包括したゾーニングが好ましいのではないか。</p> <p>○パターン1と3では、除染テントの設置、活動のスペースを考慮して、パターン2のように道路も含めてウォームゾーンとすべきである。</p> <p>○原則として初めに定義通りに広く確保し、現場の状況に応じて適切な範囲に修正する必要があると考える中で、定型に固執せず適正な範囲に設定しているとする。</p>
共同住宅	<p>○原則として初めに定義通りに広く確保し、現場の状況に応じて適切な範囲に修正する必要があると考える中で、定型に固執せず適正な範囲に設定しているとする。</p> <p>○発災室1室のみのホットゾーン設定でも問題ないと思うが、通常の共同住宅では浴室の換気扇は開放廊下側に排気される場合が多く、バルコニー側のエアコン排気等も考えると、3階フロア全体をホットゾーン設定することも考慮すべきである。</p>
工場	<p>○A作業室は数値変化なしではあるが、ドアの開放等でB作業室からA作業室に塩素が流入する可能性がある。傷病者は屋外への救出が優先だと考えられ、A作業室を除染所として使用するメリットがないことから、災害初期は、工場全体をホットゾーンとすることを考慮すべきである。</p> <p>○A作業場とB作業場の隣接状況から、活動時の出入りなども考慮すると、A作業室も含めてホットゾーンと設定すべきである。</p>
駅	<p>○不特定多数の者の出入りがある場面や、関係者による暴露者の移動が考えられる場面では、ホットゾーンを拡大する必要があると考える。</p>
競技場	<p>○競技場は広範囲であり、災害の全体像を早期に把握することは困難であり、かつ、発災後に風向きが変化する可能性もあることから、災害初期はホットゾーンを競技場内に設定し、ウォームゾーンを競技場外に設定することを考慮すべきである。</p> <p>○活動管理を容易にするため、進入統制ラインを一つにするほか、災害初期は、競技場全体をウォームゾーンに設定すべきと考える。</p> <p>○場外での検知に反応はないが、初動で例示の状態までホットゾーンを縮小するのは早計と考える。検知結果と併せて、風下側の有症状者の有無について、情報聴取を行いながらのゾーン縮小を検討するという流れが必要と考える。</p>

その他の意見

○被害者の重症度が、その地域の危険度を表すことには注目しておくべきである。即ち、被害者が歩行不能になって倒れこんでいれば、その場所は検知前からホットゾーンであると認識すべきことを周知徹底する必要がある。

○消防と自衛隊の共同訓練を実施した際に感じた点として、一度設定したゾーニングは、何があっても変更しようという考えが全くない。(例：ホットゾーンからウォームゾーンを経て、コールドゾーンに被災者を搬送する際、その距離があまりに遠く、搬送所要が大であっても、初期に設定したままのゾーニングで活動を継続する。)特に、時間が経過するにつれて、使用された剤種や散布手段が明らかになり、論理的に汚染が広がっていないと判断できる状況であったため、「コールドゾーンをホットゾーンに近づけるべき」と提案しても、「これを変更する根拠がない」という理由で意見を却下された。やはり、発災現場では被災者の人命救助と汚染被害の拡大防止の二つを考慮した際、両方を達成し得るように柔軟にゾーニングを修正すべきだと考える。よって、ゾーニングを変更できる場合はどのような場合なのか、その考え方をマニュアルに提示すべきだと考える。

～総括～

■一般住宅：「妥当」という意見が多くある一方、風向の変化や活動スペースの確保等を理由として、パターン1及びパターン3のゾーニングの範囲を敷地内で完結することなく、ウォームゾーンを若干、拡大する方が望ましい。

■共同住宅：「妥当」という意見が多くある一方、共同住宅の構造、付帯設備等による原因物質の拡散状況によって、フロア全体をホットゾーンに設定することも考慮する。

■工場：発災室が区画化されている場合であっても、隊員の出入り等により原因物質が容易に隣室に流入・拡散するおそれがあるほか、要救助者の除染活動を考慮すると、隣室又は工場全体をホットゾーンに設定し、屋外の一部をウォームゾーンとすることが望ましい。

■駅：「妥当」という意見が多くある一方、利用者の人数や往来、暴露者の移動状況等によって、原因物質の周囲のみに限定することなく、ホットゾーンを拡大して設定することも考慮する。

■競技場：災害初期は、状況把握が困難であることが多いため、ホットゾーン及びウォームゾーンともに広めのゾーニングを意識し、状況が明らかになっていくに従い、ゾーンの縮小、変更を考慮する。

以上を踏まえて、

- ※ より現場に即したゾーニングをイメージできるようにマニュアルにもゾーニング例を示す。ただし、現場の状況によって、ゾーニングの距離は一様でないため、具体的な数値等は示さないこととする。
- ※ 一度、設定したゾーンであっても、災害の進展、原因物質の有無や拡散状況、活動の効率化等から、必要に応じて柔軟に変更、修正すべきことを示す。